

な譯註によつて完全に變形されて現れた。
(十九年二月築地書店發行)、定價十二圓四十五錢、(村田數之苑)

彙報

讀史會

國史學會大會 本年度の大會は「日本文化の高揚」なる主題を掲げて、五月十四日の午後(於樂友會館講堂)より夜(於武者小路千家弘道庵)にかけて開かれ、左記の研究發表並びに講演があつた。發表者の眞摯なる態度は、緊迫した時局の下に國史學への期待愈々大きいものがある時、これに應ずべき學徒の益々健在であることを確認せしめるものがあつた。

一、裝飾的精神と六法的理念 本庄宗正氏

宗達或ひは狩野派の着色畫から裝飾的なものを受取るが、それが單なるデコラティブの意味でもなく、又派手なものなる評をも超えて觀者たる吾々に(多分作家自身にも)謂はゞ過去と現在とが融合つて一つとなつてゐる感を興さす所以、又俵屋と稱した宗達が裝飾的感覚に親近性を有し、その傑作中に源氏物語の世界に取材するものがある所以などを設問し、墨繪よりも彩色繪に親近性を有すると語つた宣長の語を引いて、此事には六法の理念と近世精神との交錯、展開が見られると述べ、時代の好みや流行は偶然

の如くではあるが、そこには一層密爾に生の原理に結ばれてゐるものがあることを認めた。

一、明治初年に於ける日本國家生成の問題

美根道廣氏

明治初年の歴史の展開は創業の大精神を以つて進められ我が國家の本質が發展の中に現前躍動した所である。新思想新風潮と共に保守的立場よりも多くの問題が發現した。人心の分散靡擦傳統的信念の動搖は生長する日本國家の性格把握を急務ならしめた。この時に當り福澤諭吉著す所の『文明論之概略』は時代の困難をそのまゝ書中に反映しつゝも文明の本質を深く考へ生長する個人的主觀的世界と日本國家發展の要義との關係を洞察する上に多くの示唆を與へるものと思はれる。

篠崎勝氏

後醍醐天皇の鴻謨を、禪宗に對し奉る御叡慮と御事績の上に拜察し大燈夢窓兩國師に依る禪宗の興隆が建武中興の歴史的精神と離るべからざるものである事を考へ、歴史の命脈の自覺に基く國史と禪宗の紐帯が強く其の間に見られる事を指摘する事に依り、禪家の立場と其の思想が、中世に於る歴史的精神の興廢に深い關聯を有する事實を明かにしようとして、先づ龜山上皇、後宇多上皇、後醍醐天皇の、南禪寺・大徳寺・臨川寺等に注がせ給ひし御理想を概観し奉り、大燈夢窓兩國師に依る新禪風の扶堅に就いて、其の一端を述べるところがあつた。

玉田義美氏

我が國神道史上中世は組織的神道理論の始めて出現した事に於

て注目すべき時代である。それに就いては佛教、宋學の如き外部よりの影響のみを考へるべきでなく、神道内部にあつてもその發達を促すべき事情の存したことに注意を拂はねばならぬとして、神祇信仰の變遷、伊勢吉田神道に見る如き一元の哲學的の神格の出現等を説き、その過程を一社の祭神の神格向上して凡ての神を包攝せしめんとする意圖及び神道の規範的の部面に於て人心に神性を認めんとする思想より生成したものと解した。

一、歐米人の日本觀三轉考

今 中 桂 二氏

十六世紀の歐米人(イベリア國民)が初めて日本に接した時より今日に至るまで、彼等の我國に對する思想の三たび變遷してゐることを指摘し、はじめは溢美の讚詞を盡し、次いで未開野蠻の異教徒と目し、遂には世界の強國として、彼等の東洋に於ける野望の防衛者たる地歩を儼存せることを認識するに至つた事情をこの間に於ける彼此の政治的文化的な展開の過程について叙述し比較考察した。

一、古代信仰に於ける靈魂に就いて 五 來 重氏

わが古代信仰に於ける神概念の發展過程には三段階があり、普遍存在としてのモノより特殊存在としてのタマに至つてや、具體化し、これが個別存在としてのカミに至つて具體的、歴史的概念となる。このタマには生命の源泉としてのアニミズム的なタマと特殊能力の根原としてのマナ表象的なタマとの二面があり、この後者の最高なるものがわが國の政治的、軍事的、宗教的、文化的な力の源たる「皇祖之靈」であり、大稜威の源たる「天皇之靈」

である。このミタマの増殖分與を戴いてわれ／＼國民は天業恢弘に翼賛し奉ることが出来る所以を古代信仰に於けるミタマノフエ(恩顧)と金鷲の神話を例としてのべるところがあつた。

一、平安京に於ける棧敷の構築

林屋辰三郎氏

棧敷は紀に見ゆる假殿にその源流を持ち、その原初意味は折口信夫博士の既に説かれた如くであるが、平安中期以降その構築が京都の流行となつた場合、もはやその古義は失はれ單に幸列見物の利便と慰樂の爲に營まれた。承暦永保の頃新興階級たる受領層の人々が賈傳過差なる棧敷を構へ、棧敷構築の發展はその存在の故に行幸路を曲げさしむるものさへ生んだ。また一盲者が西洞院面で棧敷の賃賃を業とした例もある。棧敷構築は平安京てふ都市形貌に比し些細な事實の如く乍ら、實に都市生活の一面を宛ら具象化するものであらう。

一、藝道に於ける型と傳統

千 道 雄氏

音楽舞踊演劇など時間性の藝術を精神史的考察の對象とする時、過去の作品の様式を直接知り得ぬことは一大障害であるが、そのてがかりにはその藝術の教育に見る師資相承を通じて傳統とその表現なる型の相傳があり、秘傳、流儀、家の藝等の問題に必然的に考へ及ばねばならぬ。保守退嬰的なものと見られ易い流儀、組織、世襲家藝の中に却つて藝術のきびしい鍛錬と目ざましい發展とがつづけられる。かゝる藝道の傳統への反省は一面過去の藝術様式を知る手段であると共に又それ自身日本文化の本質への考察でもあり得るとした。

一、山科大臣

角田文衛氏

世に山科大臣と呼ばれる右大臣藤原閑人の政治的生涯を檢討し、彼の現實主義的政治觀が、永手、神王を承け、更に緒嗣、時平によつて繼承される經過を究明し、かゝる政治觀が要請され、かつ没落する内面的必然性を論議した。そして最後に、左大臣時平の悲劇的立場を明にして、日本古典文化の轉換に就いて解釋する所があつた。

一、後醍醐天皇御政務の一端

中村直勝氏

昨年整理した東大寺文書に元弘三年八月日の寺訴條々次第事なる七ヶ條の案文のあるにより、從來所傳のなかつた後醍醐天皇笠置行宮に於ける御政務の一端を偲び奉り、東大寺より訴へ奉つた土地及び所得に關する主張を通じて中興御政治との矛盾を指摘し、當時笠置寺より懇懃の御書を下されたにも拘らず、寺家の去就を誤つた事實を報じ、この行宮一ヶ月の御起居の置務のみならず政務にも多端であつた御聖蹟を明にし奉つた。

國史研究室近況

實習見學 時局の要請に應へて學徒の勤勞動員が發令され、勇躍事に赴けるとき、國史研究室においては、教室に於ける講義に併せて實際に日本文化とその精神とを把握すべく、昨秋に引續き實習見學を計畫し、各教官交互に指導に當つて左記の如く各所に赴くことがあつた。

一、桂離宮拜觀 五月十三日(土)午前、西田教授以下諸教官の引率の下に、初夏の風薫る離宮の殿宇、御苑を拜觀し、一木一石

にも名匠の凝した苦心の經營に目を盡つた。拜觀終つて一同洛西松尾神社に詣り、靈食を共にして後同社裏藏の古文書を拜見した。

一、向神社・乙訓寺 五月廿五日(木)午後、柴田講師の指導にて向神社を訪ひ、園寶日本書紀をはじめ、現社殿創建に關する應永廿八年以下の棟札を拜見、宮座の組織に就いて拜聽し、次いで乙訓寺に參つては聖徳太子、空海、宇多法皇等の御由緒を回想し、寺域より出土した元乙訓寺遺物を調査した。

一、曼珠院・詩仙堂 六月一日(木)午後、藤助教授引率して先づ竹内門跡曼珠院の殿舎庭園等を拜見、閑寂な沙庭の前に茶を汲んで天台門跡寺院の消長を語り、次いで詩仙堂を訪れては戰國武士の隱逸の跡を偲び、石川丈山の詩境に接するところがあつた。

一、長福寺・梅宮神社 六月八日(木)午後、西田教授指導の下に行はれた。まづ太秦廣隆寺について、聖徳太子の御精神とともに伽藍配置の特殊様式および太秦の地について大陸文化との交渉を聽き、梅津長福寺に赴き、園寶花園天皇宸影、花園天皇宸翰月林道岐送行御消息、古林清茂筆月林道號の三幅を心ゆくばかり拜見して、天資英邁にわたらせたまへる聖徳の一端を拜し奉るとともに、天皇の御歸依を蒙ること深かつた禪師の風格を仰いだ。それより西行して梅宮神社に詣り、創立者橘氏の事蹟を偲び、平安時代豪族の生活様相について思ひを廻らすところがあつた。

一、修學院離宮拜觀 六月十日(土)午後、東伏見講師をはじめ諸教官以下洛北修學院離宮を拜觀した。後水尾上皇以來屢次の御

改修があり、徳川時代の様式は上、中、下の御茶屋とその庭園にそれ／＼示されてゐて典型的なものがあつた。其等三つの御構域が田圃のうちに布置されてゐることも、親しく農耕の勞苦をみせなはせたまふ御たよりかと拜せられて常に大御心を百姓の上にながせたまへる聖徳を偲び奉るのは畏いことであつた。

一、南禪寺本坊 六月十五日(木)午後、中村助教引率して、南禪寺本坊の殿舎、庭園を見學一巡の後、「新」南禪寺文書を披繕して、龜山上皇御歸依以來五山の上に位した禪風の展開を察し、又室町時代にこの寺内に木村の商業的經營が行はれてゐたこと、吉利支丹禁制當時の興味ある史料等を見るところがあつた。

讀史會例会 四月廿七日夜、陳列館演習室にて開催、左記の研究報告があつた。

御蔭祭について 平山敏治 郎氏

賀茂下社に行はれる御蔭祭の現状調査の報告と、併せて葵祭の發達とこの祭儀との關係に及び、本社祭の祭りは古く御蔭祭にあることを推定した。且つその祭儀の既に中世に於ける變遷を上社の御阿禮と比較して考察し、馬上神幸、神靈奉遷の形式の二問題につき各地の實例を引いて様式的な考察を試みた。

兵庫縣熊次村見聞記 藤 直 幹氏

今春積雪を踏んで但馬養父郡熊次村に入つた見聞の報告である。戦時下山村の實況、冬の村民の生活についての興味深い觀察があり、且つ血縁的な集團としてのマキその他の組織を歴史的に討ね、それが經濟的な生活にも深く關係してゐる現状を鋭く解剖

された。

東亞研究所委託事業部講演會

東洋史研究室に於ては昭和十六年以降、東亞研究所の委託を受け、歐米勢力の對支勢力滲透史の調査を鋭意進めつゝあつたが、この程その第一期を終了、恰も同じ調査員の東京側諸氏を迎へ、共にその成果の一部を發表し、世の要望に應へることとなり、東亞研究所主催の下にその京都に於ける第一回の公開講演會を五月十五日午後一時より北白川東方文化研究所に於て開催した。當日は總長羽田博士も出席、開會の辭を述べられ、各講師また夫々日頃の蘊蓄を傾け、聴衆に多大の感銘を與へ、盛會であつた。講師演題、左の如し。

- 一、英國の廣東入市要求に關する一考察 内田 吟 風
- 一、支那の開國と國際法 植田 捷 雄
- 一、開港以前の清國海關事情 安部 健 夫
- 一、支那移民を繞る米支關係の經緯に就て 田村 幸 策

西洋史讀書會

例會 四月二十一日午後三時より原教授室にて第三回例會を開催。出席者は、原教授、村田講師以下九名。

一、戰爭史學の基本問題 前川貞次 郎氏

例會 五月十三日午後二時より原教授室にて第四回例會を開催。出席者は、原教授、鈴木、井上兩助教、中山講師以下十五名。

一、歴史と政治との關係に就いて 西井 克 己氏

地理學談話會

例會 六月十七日(土)午後二時より地理學實習室に於て左記研
究發表を行った。出席者小牧教授をはじめ九名。

一、ニューギニア開發史

村上 次 男氏

一、北支見聞記

木村 憲 治氏

考古學教室の遺跡調査

一、備中高島史前遺跡の第二回調査 五月八日から十八日に互
つて第一回同様同地高島聖蹟保存會の援助を受けて發掘調査を遂
行した。参加者は梅原教授。小林助手・角田助手。及川大學院學
生の四名で、今回は同島黒土に於ける遺跡を四ヶ所に互つて發掘
し、王泊に於けると略々同一の遺物包含状態を確めると共に多數
の土器を得、その最下の層に於いて中期繩文式土器片の遺存する
ことを注意した。なほこの調査を利用して梅原。小林の兩名は澁
口那富田村の宗澤節雄氏を訪問、同氏蒐集に係る豊富な中津貝塚
出土品を調査する所があつた。

二、近江栗太郡安養寺古墳調査 昭和九年三月採土工事の際偶
然粘土槨に掘當り多數の遺物を出した同地大塚古墳に對して外形
の實測その他の基本調査を行ふ爲に、六月二・三の兩日梅原教授
角田助手・澄田・松田・及川・林の六名が出掛けて、宇野米太郎
氏外土地の有志の援助の下にこれを遂行し、附近の大規模な前方
後圓形の椿山古墳をも併せて視察する所があつた。

會 報

史學研究會評議員會

五月四日午後四時より陳列館貴賓室にて開催、各評議員並に不
破委員出席。西田評議員より「史林發行所變更の件」に就いて提
案あり、出席評議員異議なく賛成、次號(第廿九卷第三號)より星
野書店にて發行と決定せり。

尙此際『史林』の讀者網の擴張發展方策として雜誌内容等に關し
て各評議員より種々意見の開陳ありたり。

會 員 動 靜

◇入 會

- 吹田市垂水一 一 落 合 大 一 氏
- 兵庫縣武庫郡良元村寶塚南口 眞 島 行 雄 氏
- 京城市孝子町七〇ノ一 李 丙 周 氏
- 大阪府北河内郡寝屋川町字泰七三〇ノ二 豊野住宅七七 多葉田 伊之助氏
- 京都市左京區田中飛鳥井町一六 五嶋方 高 田 弘 氏
- 京城市中區倭城臺町總督府官舎第十一號 有 光 敦 一 氏
- 大阪府豊能郡箕面村平尾三七四 (右不破幹雄紹介) 大 庭 脩 氏

(右猪谷文臣氏紹介)

滋賀縣滋賀郡 滋賀海軍航空隊文官室

川上喜代四氏

(右三上正利氏紹介)

西宮市宮西町二一

田岡香逸氏

(右角田文衛氏紹介)

◇轉居

高岡市堀上町四一

高瀬・重雄氏

蒙魁張家口市隆昌巷二號 善隣協會

西北研究所

藤枝 晃氏

◇寄贈交換圖書

東大寺美術讀本

鶴故郷會

契沖阿闍梨遺文の發見

同 大倉精神文化研究所

水戸學の精神と立場

同

哲學研究 二九ノ二、四

京都哲學會

考古學雜誌 三四ノ二、四

日本考古學會

史迹と美術 一五ノ三、四

史迹・美術同政會

史學雜誌 五五ノ二、三

史學會

東洋學研究 第一

東洋學同政會

人類學雜誌 五九ノ三、四、五

日本人類學會

社會經濟史學 一三ノ一一、一二・一四ノ一

社會經濟史學會

帝國學士院紀事 三ノ一

帝國學士院

國語・國文 一四ノ二、三、四

京都帝大文學會

歷史學研究 一四ノ二、三

歷史學研究會

國學院雜誌 五〇ノ一、二、三

國學院大學雜誌部

文 化 一一ノ二、三、四、五

東北帝大文學會

東方學報 一四ノ三

東方文化學院

史 淵 三〇一三一

九州史學會

書 香 一六ノ一、二

大連圖書館

滿洲學報 八、九

滿洲學會

東洋史研究 八ノ五、六

東洋史研究會